

II-392

里山の保全と活用に関する研究

大阪府環境局 ○安達 一郎
大阪大学 正会員 盛岡 通

1. 研究の背景及び目的

近年の日本の自然が急速に失われてきた理由は、産業開発、都市開発、リゾート開発などの影響のみならず、人と森林の関係が希薄になっていることも1つの原因と考えられる。とくに自然環境が都市の中で急速に失われていくために、原風景としての自然を都市の中に求め難くなり、自然観の喪失の時代を迎えているともいわれている。今後の森林保護の論理は、人と自然との関わりを軸にしていくことが必要不可欠である。

そこで本研究においては、対象地として大阪近郊森林をえらび、都市と里山の関係を「都市民が里山の森林を利用する」という視点から評価した上で、今後の大阪近郊森林の保全と活用の方策を提示することを目的とする。

2. 大阪近郊森林について

2.1 大阪近郊森林の現況

森林には、①水源涵養・土壌保全機能、②林業機能、③保健休養機能、④人間にとっての心理価値、等の様々な機能がある。これらのことを公益的機能として評価していくと共に、これらの機能を生かした都市民へのサービスとして、活用を考えていく必要がある。

図-1に大阪近郊森林面積及び人口の推移を示す。府下の人口の推移は森林面積に反比例しており、林地を開発して人口増加と都市化が進行した事がわかる。また林業の現況は厳しく、伐採量も植林量も減少する一方であり、山林地域の生産・産業基盤はきわめて脆弱となっている。一方行政の対策として、保護地域の拡大や府民の森の設置など様々な保護政策がとられてきているが、開発圧力は高まっている一方であり、今後さらに保全・活用をしていくには、新たな対策を打たなければならない状況にきている。

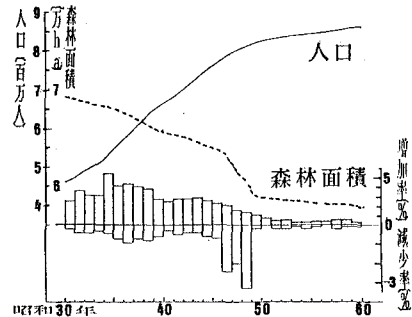


図-1 大阪府の森林面積及び人口の推移

2.2 大阪近郊森林の6地区分析

そこで、大阪近郊森林を6地区（北摂北部、北摂南部、三島、河内、長野、泉南）に分け、「林業」と「保健休養機能」の機能が十分に大きければ森林の保全・活用がなされているかを調べた。まず、各地区について、人口増加が森林の減少と対応し、森林の減少が宅地開発によるものであることが明確になった。次に、「林業機能」では森林組合の施業比較を行い、「保健休養機能」については森林のメッシュデータを主成分分析して求められたデータ¹⁾を用いて、「林業」、「保健休養機能」の両機能と、森林の保護施策について比較し各地区の相対値を求め、グラフに示したものが図-2、図-3である。保健休養機能が高い地域は保護規制も厳しいということが読みとれる。これは、今後規制の手段で森林を保護していくにしても、保健休養機能は重要な項目である事を示している。また、林業機能と保健休養機能の関係をみた場合、林業機能が高い地域は保健休養機能が低くなっている。大阪近郊森林においては、林業機能が失われていく反面で、補うように

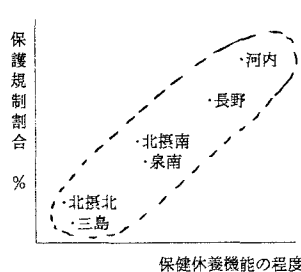


図-2 保護規制割合と保健休養機能の関係

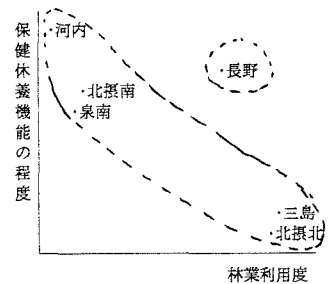


図-3 保健休養機能と林業機能との関係

保健休養機能が高まってきたと考えられる。それと同時に、現在では林業機能の高い地域も、今後林業機能の後退が進むと大規模開発を招く恐れがあり、自然を活かした保全的活用がますます求められて来ると考えられる。

3. 大阪近郊森林における保健休養機能について

昨朝日新聞が行った関西5私鉄リレーハイキングの参加者数を調査してみたところ、1回の参加者数の平均が2000人を越えており、また各地の山々の登山者数は、年間で金剛山の130万人をはじめ、葛城山で25万人、岩湧山で20万人、剣尾山で10万人など各山とも非常に多数の人を向かえている。そこで、年間約130万人もの人を集めている金剛山について現地調査を行い、これだけの人が登山する理由を考察した。その結果、次の4点が明らかになった。①頂上からの眺めが非常によいこと、②春夏秋冬で違った魅力があり、新緑や紅葉、樹氷といった様々な要素があること、③登頂回数を記録できるカードがあること、④都心からの距離が近く、都心から登山口まで1時間30分あれば到着すること、である。以上の事柄から、金剛山が便利でありながら家のまわりや都市公園では味わえない非日常的な雰囲気を保っていることが大事な要素と考えられ、このことはゆとりのない空間からの開放を都市民が望んでいる事を示しているとも考えられる。

大阪近郊森林の活用のための第二の事例調査として、高槻森林組合が運営している森林観光センターを対象として、ここを訪れた人にアンケートをとり、大阪近郊森林に求められているものを調査した。その結果、自然をそのまま享受したいという意見が多く、そのなかで都会からの開放性を得られる活動、用意されたものでなく、自分で造っていく行為が志向されていることが明らかになった。

以上の結果から都市民の大阪近郊森林に対するニーズは高く、その求められる行為の内容は都市からの開放であり、手作りで森林の素材を工作、調理することで、森林の持つ本来の機能が求められているといえる。したがって、森林と人との関係を深めていく活用を考えていく事が近郊森林の保全に向けて重要な事である。

4. 民俗学からみた大阪近郊森林の保全と活用

かつて森林の活用においてバランスのとれた利用が行われていた。これは入会地といった規範の他に、近郊森林である里山を3つの空間構成で捉え、各空間に意味付けし、それに沿った活用がなされていた事があげられる。現在において、その意味を捉えた空間の再構成が必要である。各区分の意味とともにその区分における現在と過去の利用の比較を表-1に示す。

「山頂」……天の神が降りて来る場所として聖なる空間としての意味付けがなされていた。

「山腹」……入会地としての利用場所であり山の中でも最も多面的に利用されていた空間であった。

「山の辺」……山への入口で「ムラ」との境界をなした場所であった。また山にはいる空間として「神社」が設けられ、山を意識させる重要な空間であった。

表-1 森林の現在の利用と過去の利用の比較

利用 場所区分	現在の利用	民俗学からみた過去の利用	
	休養機能について	『貴族型』	『庶民型』
「山頂」	ハイキング・展望	ハレの空間 国見行為	聖空間 (神の降り立つ場所)
「山腹」	府民の森 「D.I.Y.」空間 等の多様な利用	狩り等の 遊興空間	生活品採取 共同利用の場
「山の辺」	開発に押され 何もない	他の世界 との境界	里山との入口 祭祀空間

3つの空間区分のもとで過去、現在の利用形態を表現したが、特に山の辺空間の活用が乏しいことが指摘できる。「山頂」はダイヤモンドトレールなどによって、森林の面的な保全の意図空間を縁どりし、山稜を貫くことがなされ始めている。また「山腹」では単発的ながら「府民の森」などにより、多様な利用が促進されてきた。その中で、「山の辺」空間は、山との付き合いのために重要な空間であったにも関わらず、その意味を失ってきたことが大きな問題であろう。生きられる場所を求める森辺の思想とともに²⁾、今後の森林と都市との関係を捉えていくうえでは、「山の辺」空間を整備していくことが1つの方向としてあげられる。森林の面的な保護へ意図して、例えば「山の辺の道」づくりを行っていくことも考えられる。いまでも「山の辺」には神社が多く、そこを巡礼するような形で整備し、「山の辺」が都市民にとって身近なものとなり、それを足がかりに「山腹」空間での多面的な利用や、「山頂」へのハイキング利用といった活用方法も考えられる。

参考文献 1) 榎 幹雄 「近郊森林における森林施策のあり方」京都大学農学部博士論文 1989

2) 樋口 忠彦 「生きられる空間」（細川・中村編、景観づくりを考える） 1989 P.48